



# 央州寺通信 七月号



菅原祐軌 [ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com](mailto:ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com)

## 「仏教と月のウサギ」

早いもので二〇十九年も残す所五ヶ月となりました。本願寺第八世宗主蓮如上人はご門徒の方々に向けたお手紙である『御文章』一帖目第十一通の中で人生は「電光朝露の如し」と譬えられました。本当に稲妻や朝露のようにあっという間に過ぎていってしまうのが人生であるのかなと感じます。なるべく無駄の無い一日を、とは思いつつもダラダラと過ごしてしまう日もあり、「諸行無常」の理を頭では理解してもそれを常に感じて生きていくことの難しさを感じます。それと同時に、だからこそ仏さまの呼び声に常に耳を傾けて「当たり前」と思っているものを「有難い」と気づかせていただきながら生かさせていただかねばならんと感じる今日この頃です。

さて、今月のタイトルは「仏教と月のウサギ」です。日本では小さい頃から月にはウサギがいると聞かされてきましたし（それを信じる人は今はいないでしょうが...）そのように伝承されてきたのには何か理由があるのではないかと思います。調べさせていただきました。

皆さんは「三蔵法師」と聞くと真っ先に夏目雅子さんの顔を思い浮かべるのではないのでしょうか？そう、『西遊記』に三蔵法師としてお坊さんが出てきます。夏目雅子さんのイメージを持っておられる方には申し訳ないですが、この三蔵法師という方、実は男の僧侶であり、本当の名を「玄奘（げんじょう）」といいます。「三蔵法師」というのは経典をおさめた「経蔵」、戒律をおさめた「律蔵」、経典に対する註釈や法の分析である論書をおさめた「論蔵」の三蔵に精通する僧侶に対する敬称であり、固有名詞ではありません。

玄奘三蔵は七世紀の僧で、当時の国禁を犯してまで天竺まで旅をなされ、天竺の様々な土地を

みて歩き、ナーランダー大学という学校で唯識という大乘仏教の哲学を学ばれ、十六年の長い旅と勉強の後に膨大な経典を中国（唐）へと持ち帰られた方です。どうやら旅に出た頃の唐は王朝が出来たばかりで不安定であったけれども、帰る頃には安定しており、国禁を犯した玄奘ではあったものの、帰国の際には長安にて手厚く迎え入れられたそうです。

この玄奘三蔵は原語であるサンスクリットに忠実に翻訳されることで知られ、浄土真宗ではお勤めしませんが、有名な『般若心経』を漢訳されたのも玄奘三蔵です。玄奘三蔵以降の翻訳を「新訳」と呼び、それ以前を「旧訳（くやく）」と呼びます。私達が敬意を持って「天親菩薩」と呼ばさせていただいているインドのヴァスバンドゥという僧侶の漢訳も実は「旧訳」でして、「新訳」では「世親菩薩」と言います。（ちなみにこのことは宗祖親鸞聖人も『入出二門偈』というお聖教の中でおっしゃっています。）

私達、浄土真宗の門徒がよくお勤めさせていただくお経典に『仏説阿弥陀経』というお経典がございますが、このお経典を翻訳されたのは鳩摩羅什という四-五世紀のお坊さんで、この「鳩摩羅什」、「真諦」という唯識に関する論書を主に漢訳された方、「玄奘三蔵」、そして「不空」という密教経典を主に翻訳された方の四名を「四大訳経家」と呼びます。

さて、余談が長くなってしまいましたが、玄奘三蔵の旅行記に『大唐西域記』というものがあります。この『大唐西域』巻七中に「月のウサギ」に関する記述があります。実は月にウサギがいるという考えは日本特有のものではなく、インドや中国でも語られていたものであります。この「月のウサギ」の話はお釈迦様の前世の話をまとめた「ジャータカ物語」という物語の中にあるお話ですが、皆さんも一度は耳にされたことがあるのではないかと思います。簡単にまとめますと以下ようになります。

ある所に仲が良く、他に対する心使いも出来るウサギ、キツネ、サルがいた。帝釈天はこの動

物達がいかに仲が良いか、また彼らの慈悲心を試すために老人に姿を変え、空腹であることを動物達に伝えた。その老人を助けるためにキツネは川で魚を取り、サルは木から果物を取ってきた。しかし、ウサギだけはなにをやるわけでもなくピョンピョンと飛び跳ねて遊んでいる。そこで老人は「あなた達はまだ本当には仲良くありません。ウサギだけは手ぶらで遊んでばかりいる」とウサギの悪口をいいました。するとウサギは他の二匹に「薪」を集めてくる様に伝えて、火を起こさせ、老人に「私は身体も小さく、モノを採る能力にも長けていません。どうかこの私の身体を食事としてください」とその火の中に身を投げ入れた。そのウサギの捨身の慈悲心に感嘆された老人は帝釈天へと姿を戻し、ウサギのことを忘れぬように月にその模様を残した。

という話が「兎王本生譚」という内容で『大唐西域記』巻七に載っています。これらのような慈悲の行の功德などを積み上げて、最終的には釈迦族の王子として生まれ、さとりを開かれたのがお釈迦様である。という話の流れにもっていくのがこの「ジャータカ物語」なのですが、私はどうもこの話が好きになれません。せっかく仲良く暮らしていた動物達に帝釈天という神さまはわざわざ試験のようなことをして、その結果ウサギは命を落とす結果となりました。なんとも意地悪な神さまだなと思います。

私の想いはさておき...このお話から私達が学べることは二つあります。一つは「布施行」を行う側の難しさです。自己を犠牲にしてまで他に施すというのは感動的なことではありますが、そこまでしなければいけないのかと思うと私は腰が引けてしまいます。

二つ目は「布施行」を受け取る側の心持ちです。私達は毎日の食事を当たり前のように受け取ってはいないでしょうか。毎日の食事はこのウサギのように自己犠牲をしてまでもこの私のいのちを繋いでくださっている尊いものであります。だからこそ、私達は毎日の食事を「( 尊い命を ) いただきます」と感謝していただきますし、「( 有難い ) ごちそうさまでした」と尊い命の「布施

行」・ ご馳走を有難くいただきましたと食事を締めくくるわけです。

飽食の時代といわれ、多くの残飯が毎日のように捨てられていますが、尊いのちをいただいているのだという気持ちが本当にあるのであればそんな勿体無いことはできませんね。この月のウサギの話を通じて今一度私達は毎日尊い命をいただいて生かさせていただいているのだと実感していただければ幸いです。

合掌

八月三日は央州寺のお盆です。十五時よりイベントは始まりますので皆様お誘いあわせの上、是非お参りください。それでは、また来月。

文責・菅原祐軌

央州寺駐在開教使